

チューニングをする 楽しさの原点は 世界にたった一台の クルマを作ることに

真っ黒に塗装されたingsのフルエアロには、同系色のストライプ2本でグラデーションが付けられている。「単なる湾岸系」とは、なんとなく違う雰囲気>Z33。不良っぽさと同時に洒落さが同居するようなたたずまいに、良い意味での違和感を感じた。そしてそのナゾは、ガレージに入ると一気に解ける。トータル社屋には、その時でハーレー・ダビッドソンが3台も入庫していたのだ。なんでも、ナイトロッドを始めた水冷ハーレーのワンオフマフラーを作っているのだという。ちなみに水冷エンジンとなった新世代ハーレーは、そのルックスが近代的でクールになったのと同時に、そのサウンドまでが大人しくなってしまった。これをなんとかしてくれ! と、オーナーが速くから自走で持ち込むの

だという。なんとその一台は、仙台からだった。

話は少し脱線したが、そういうこと。このワイルド&フリーな空気感が、Z33からも発せられているのだ。とはいえ、聞けばその馬力は600ps前後。初期型Z33から考えると、実に倍以上の出力は、単なるお遊び的な数値ではない。

「そもそものきっかけは、Z33を手に入れたときにHKSと話をしていた、『T04Zは無理(入らない)でしょ〜!』と言われたところからなんです。メーカーが無理だということをやるのが、私にとっては意義あることだと思ったから(笑)」と、トタルの代表である小里さんにはこやかに語る。

メーカーが無理だということ。それは、正確にいうと「やってできなくはないが、非効率なこと」であったり、



Tuned
Z33
Special!

Garage TOTAL

Vol.6のZ-MAG ギアボックスでもご紹介したガレージ・トータルとそのZ33ターボ。
T04Z 63Tというビッグサイズタービン押し込んだこのモンスターが、
いよいよ走り出すという。しかし興味深いのはそのパワーだけではない。
トータルはなぜ、このZ33を作ったのか。
そこに見えてくるこだわりこそ、面白さの秘密が隠されているのだ。

Photo:Satoshi KAMIMURA 神村 聖 Text:Z-Magazine 編集部

「そこに多くのパイ(ユーザー)はいない」ことをさす。

果たしてこのZ33にはビッグタービンが詰め込まれ、インマニからエキゾーストまでを、トータルがワンオフで制作した。あえての反逆。理由ある反抗。当初Zマガジンが考えていたのは、このZ33がどれだけの速さで、たとえば富士や筑波を走るのか? という短絡的なものだった。しかし、このクルマが面白い理由は、そこだけじゃない。今の時代に、こんなマシンを走らせる楽しさこそ、伝えるべきことだと思うのだ。ということで、まずはその、モンスターインプレッションをお届けしよう。